Osaka University Knowledge Archive

Title	死に逝く人のスピリチュアリティ覚醒の研究
Author(s)	窪寺, 俊之
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44545
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

氏　　名　窪寺俊之（くぼてら　としゆき）

博士の専攻分野の名称　博　士（人間科学）

学位記番号　第　17371　号

学位授与年月日　平成14年12月18日

学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当

学位論文名　**死に逝く人のスピリチュアリティ覚醒の研究**

論文審査委員　（主査）
教　授　柏木　哲夫

（副査）
教　授　三木　善彦　　助教授　恒藤　　暁

論文内容の要旨

論文目的：

この研究の目的は、死に逝く人のスピリチュアリティの覚醒するメカニズムを分析して、死に逝く人へのスピリチュアルケア（霊的援助）の可能性を明らかにすることである。

仮説：

すべての人の中にスピリチュアリティ（霊性）は、普遍的に存在する。スピリチュアリティは、死の危機に直面する時に、すべての人の中で覚醒する。覚醒の動因は、死の危機によって既存の「わたし」意識が崩壊することから起きる。崩壊した「わたし」意識の回復（癒し）を求めてスピリチュアリティ（霊性）が覚醒する。

宗教を持つ、持たないに無関係に、そのスピリチュアリティは、生命の危機によって覚醒し機能する。危機は「わたし」意識を崩壊させるので、その崩壊した「わたし」意識を回復するために、宗教を求める。宗教は「わたし」意識の回復（癒し）をもたらす機能があるからである。宗教を求めるメカニズムは、スピリチュアルなものを求めるメカニズムと共通する。

闘病記・遺稿集・日記・エッセーなどを資料として、危機体験を分析し、危機体験と宗教との関係を明らかにすることで、スピリチュアリティの特徴を明らかにすることができると仮定する。その上で、スピリチュアリティの機能を「わたし」意識の回復と考える。それによって、スピリチュアリティの覚醒のメカニズムを明らかにできる。

論文構成：

目　次

第1章　緒論 …… 1
　第1節　問題設定 …… 2
　第2節　研究の目的 …… 3
　第3節　研究の範囲 …… 3
　第4節　研究の方法 …… 5

第５節　研究の意義 …… 5

第２章　研究史：死に逝く人々へのスピリチュアルケアへの関心 …… 6
第１節　シシリー・ソンダースとメアリー・ベインズ …… 7
第２節　ロバート・G・トワイクロスとシルビア・A・ラック …… 8
第３節　リンダ・J・カルペニート …… 10
第４節　死と死別に関する国際作業委員会 …… 12
第５節　インジ・B・コーレス …… 16
第６節　世界保健機関 …… 17
第７節　ケネス・J・ドカ …… 20
第８節　ジョージ・フィチット …… 23
第９節　ジョン・モーガン …… 25
第10節　ドロシー・C・レイ …… 27
第11節　まとめ …… 27

第３章　研究方法 …… 29
第１節　問題提起 …… 29
第２節　資料としての闘病記 …… 29
第３節　研究仮説 …… 34

第４章　研究内容
第１節　死と人生の危機 …… 35
１．危機の理解（研究史、定義） …… 35
２．危機の種類 …… 38
３．「わたし」意識の鮮明化 …… 78
４．危機による自己理解の崩壊・自己獲得 …… 81
第２節　死と宗教的関心 …… 82
１．宗教的用語（統計的データ） …… 84
２．ケース分析（個人別） …… 97
３．宗教への関心のレベル …… 204
４．宗教用語使用の特徴 …… 205
５．宗教用語に現れた魂の苦痛（スピリチュアルな苦痛）の特徴 …… 235
６．覚醒されるスピリチュアリティ：宗教からスピリチュアリティへ …… 236
第３節　スピリチュアリティの特徴：危機の中での自己獲得・自己和解の道 …… 239
１．スピリチュアリティの定義 …… 239
２．スピリチュアリティの性質 …… 240
３．スピリチェアリティの側面 …… 241
４．スピリチュアリティの内容 …… 242
５．スピリチュアリティの機能＝癒し・再構築・和解 …… 243
６．内面化・個性化・安定性・納得化・自己確立化 …… 245
７．「わたし」意識の回復（癒し）＝新たな「わたし」意識の回復の方法 …… 248

第５章　結論 …… 262
第１節　結果 …… 262

第２節　吟味 …… 264

方法論：

ガンを患い死に正面した人の闘病記・遺稿集・日記・エッセーを資料（51 冊、45 人）として選出する。その際、二つの条件を定める。

第１条件は、著者はガンを患い死に直面している。

第２条件は、著者は既存の宗教を持たないと公言している。

この二つの条件を藩たす遺稿集等を選ぶ。

死の危機に直面した人の危機体験を 12 のカテゴリーに分類する。各カテゴリーに共通する体験は、既存の「わたし」意識の崩壊と鮮明化であることを明らかにする。

次に、崩壊した「わたし」意識と宗教との関係を明らかにする。闘病記・遺稿集・日記・エッセーの中から宗教用語を抽出する。宗教用語使用の特徴を明らかにする。更に、宗教用語が用いられている文脈から宗教用語に込められた著者の苦悩・心情・願望・後悔・怒りなどを明らかにする。宗教をもたないにも拘わらず、宗教用語を使用して表現しようとした「もの」を探し出す。それは具体的には、「魂の安らぎ」「生きる意味」「怒りの対象」を宗教に求めているからであることを明らかにする。失われた魂の安らぎ・喪失した生きる意味・怒りやり場のなさが、宗教がもつ「癒し」に期待していることを明らかにする。

宗教とスピリチュアリティの相違点を明らかにする。宗教には、教団・教祖・教義・礼典などがあるが、スピリチュアリティは、それらを生み出した魂の苦悩・心情・願望が表現されていることを明らかにする。

死の危機に直面した人の「スピリチュアリティの覚醒」は、「わたし」意識の癒しであることを明らかにした上で、更に、スピリチュアルペイン（霊的苦痛）を満たすものが「外的絶対的他者」と「内的究極的自己」への探求にあることを明らかにする。

これらの分析を元にして、スピリチェアリティの性質・側面・内容・機能・癒しの方法などが明らかにされる。最後に、全ての人（宗教の有無に無関係に）へのスピリチュアルケアの可能性を明らかにする。

結果：

死の危機に直面した人たちの闘病記・遺稿集・日記・エッセーを分析することで明らかになった結果は以下の通りである。

1）闘病記・遺稿集・日記・エッセーには、ガンを患って死に直面した時の苦悩・心情・願望が赤裸々に吐露されている。その意味で、それらの資料は死に逝く人々の深い心の問題を分析するには適した資料である。

2）死に直面した人たちの危機は、肉体的危機・能力の危機・自尊心の危機・役割の危機・生きる目的の危機・死の接近の危機・罪責感などの危機に分類できる。

3）それらの危機は、既存の「わたし」意識を崩壊させ鮮明化する。その特徴は「わたし」への関心の集中化と挫折感・敗北感・無価値感などである。

4）危機によって崩壊した「わたし」意識の回復・再構築・癒しの為に、宗教への関心を示す。

5）宗教への関心の特徴は、以下のようである。

１宗教の創造

２宗教の混同

３理性と感情の分離

４宗教への入信には無関心

5「安らぎ」「意味付け」「怒りの対象」への必要

6）宗教用語使用の根底には、宗教への入信はない。無関心である。にも拘わらす、宗教に関心をもち、自家制の宗教を創造している事実は、宗教への「期待」「ニーズ」があるからである。宗教への期待・願望とは、「魂の安らぎ」「生きる意味」「怒りの対象」である。

7）宗教への関心は、病の癒し・生命の根源・全能者・不思議を行う方などである。

8）スピリチュアリティの覚醒は、死の危機が「わたし」意識を崩壊させるので、その崩壊された「わたし」意識の癒しを求めるところから起きてくる。「わたし」意識の癒しに必要なものは、「魂の安らぎ」「生きる意味」「怒りの対象」であり、それをを、自分の存在を超えた力をもつものに目を向けることと、自分の内側に新たな自己を見付け出すことで得ようとする。

9）宗教と「スピリチュアリティ」の共通点は、「わたし」意識の「癒し」である。相違点は、宗教には教団・教祖・教義・経典などが存在する。しかし、「スピリチュアリティ」には、それらのものがない。あるのは、「自己の存在を超えたもの」（それを「外的絶対的他者」と呼ぶ）と「自己の中に真の自己を求める」（それを「内的究極的自己」と呼ぶ）によって「わたし」意識の癒しを得ることである。これが「スピリチュアリティ」の特徴である。

10）「スピリチュアリティ」には、性質・側面・内容・機能・探求の方向性などがある。

11）「スピリチュアリティ」の内容は、哲学的内容・宗教的内容・心理的内容が混じっている。スピリチュアリティの性質は、「わたし」意識の中核にあり、人生を支える基盤である。

12）スピリチュアルケア（スピリチュアルペインの緩和）には、死に逝く人自身の「わたし」意識へ関心を集中させ、哲学的・宗教的・心理的内容への配慮が必要である。崩壊した「わたし」意識の癒しには、外的絶対的他者（自己超越への関心）と内的究極的自己（究極的自己への関心）とがあるので、ケアはそれに向けてなされるのがよい。

研究の意義：

宗教の有無に関係なく、死に逝くすべての人のスピリチュアルケア（霊的援助）が可能になると考える。

論文審査の結果の要旨

死に直面したがん患者のスピリチュアリティ（霊性）の覚醒のメカニズムを明らかにした研究である。資料として死に逝く人たちが遺した闘病記・遺稿集・日記などを用いて、死に危機を詳細に分析した。更に、その人々と宗教の関係を宗教用語を丹念に抽出し、そこに現されている願望・期待などを明らかにした。この研究は、スピリチュアリティの本格的研究が今日までなされてこなかったことを考えると、非常に貴重な研究である。また、このような研究が新たな研究の可能性を開いたといえる。これらのことを考えて博士学位に相当する論文と判断した。